

## トイレ異名と総合トイレ学

聖徳大学付属中学・高等学校 森田 英樹

ただいま御紹介頂きました森田でございます。

私学生の頃は西洋文化をやっております、現在は高校で世界史の教員をいたしている、まったくの文科系の出身であります。そのため理科系の事に関してはい全くの素人でございます、専門の方からすると見当はずれのこともあるかもしれませんが、宜しくお願いいたします。

お手持ちの資料に『便所学の系譜』『廁学の系譜』『トイレ学の系譜』と書かれています、便所学・廁学・トイレ学と言うのは、特に一般に言われている学問領域ではありません。私がトイレの歴史を考えていく上で、『便所学』と呼べる研究分野とその時期、廁学と呼べる研究分野とそ

の時期、トイレ学と呼べる研究分野とその時期があったのではないかと考え命名したものです。そして、新たに私が提唱したい『総合トイレ学』と呼べる新たな研究が可能なのではないか、というお話しをしたいと思います。

まず最初に私、図書館と言うところがあまり好きではありませんで自分が研究する上で必要な文献は基本的に自分の足で集める主義であります。なぜかと言いますと、図書館の本は自分のものではなく、自分のものに決してならないからです。図書館の本を利用して行う研究は、あたかも他人が仕込みを済ませた食材を使って料理をする料理人のようで、その食材がどのような経緯のもので

あつても氣にとめない無責任さを感じます。良き料理人はその食材の鮮度を確かめ、産地や農葉の有無など、多くのこだわりを持ち、時には地方を回り生産農家と話をし、仕入れ、食材をとことん納得の行くまで研究をし、それらを自分自身で仕込みをした上で、良き料理を産み出して行きます。良き研究者もこれと相通するものを感じます。ですから、現段階で私が収集した文献に多くの漏れがあることは承知していますが基本は押さえていると思いますので、発行年を追ってお話しを進めたいと思います。

## 便所学の系譜

『海軍医事報告撮要第六七号』

大正七年十月二十日（一九一八）

現在もそうでしょうが、戦前において軍隊は大変な研究機関でして、トイレの問題に關してもどのような研究がなされていたかを知ることが必要

です。しかし、軍の研究は膨大な量がありますので、とても総てを見ることはできません。私が見つけた本書は、練習艦などが海外を訪れた時の衛生問題などに関する医務衛生記録で各国の下水に關する報告も多く見られます。その中に、海軍軍医中監松隈武次さんの『船舟用便器に就いて』という論文が掲載されています。これは、港に停泊する船から投棄される尿尿が海を汚染し、病気が発生することへの対策が書かれているものです。具体的には、石油缶を加工して便器を作り垂れ流しを防止する提案がなされています。では陸軍の方はどうかと言いますと衛生問題に關しては『陸軍衛生制規』という大冊がありますが、その中にはほとんど尿尿をどうしたら良いか具体的な記述はありません。「厠番をもうけて清潔に管理しなさい」という程度で具体的ではありません。

『建築写真類聚・改良和風便所』

大正十年五月五日 一円十銭

これはシリーズものでして、新時代の各種建築設計をイラストと図面で紹介したものです。恐らく、コンテストの様に応募されたものを掲載したのではないかと思われれます。このシリーズの中に第三期『改良和風便所』第六期『改良便所』（昭和三年）があります。当時一円十銭で販売されました。このように本書は建築の分野からトイレにアプローチしているものです。

### 『建築衛生工学』

大澤一郎・櫻井省吾著 大正十三年十二月二十五日 六円

本書の主な記述としては、「第一編衛生器具」の中に「水洗大便器」「小便器」「洗滌用水槽、フラッシュバルブ」「第三編排水排氣工事」の中に「衛生器具の取り付け」「屋内下水」「第五編汚水浄化法」などが書かれています。トイレのウエイトを頁数で示すのが適切かどうかは、わかりませんが総頁に占めるトイレの記述の割合は、約

七%となっています。

恐らく、衛生工学の文献史の上ではこの櫻井省吾さんの頃から始まってくるのではないかと思われれます。では、櫻井省吾さんの略歴ですが、一八九七年生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業。一九二四年慶応大学医学部で寄生虫学・免疫学・検疫学・衛生学・細菌学を学んでいます。そのため、衛生工学の中でも寄生虫学や細菌学の方面からトイレに関心を持たれていたのではないかと推測されます。一九五二年から櫻井建築設備研究所長を務めています。この会社はホテルニュージャパン、高輪・芝のプリンスホテル、文京区役所などの空調・給排水の仕事をしていたようです。このように本書は衛生工学の分野からトイレにアプローチしているものです。

### 『台所便所湯殿及井戸』

大澤一郎・櫻井省吾著 昭和二年九月二十日 二円三十銭

これは先の『建築衛生工学』と同じ大澤一郎・櫻井省吾著によるもので、『建築衛生工学』もそうなのですが大澤一郎さんは早稲田大学の先生で恐らく名前を貸しただけで実際の執筆は櫻井省吾さんによるものと思われまゝ。本書は専門家向けに書かれた『建築衛生工学』の評判が良く、今度

は一般読者向けに水回りに関して、分かりやすく肩のこらない本として書かれたものです。本書で注目すべき点は、一般読者向けであるにもかかわらず、タイトルに『便所』と始めて明記されていることです。トイレに関する記述は『建築衛生工学』よりも増加しまして全体の二十五%を占めております。内容面でも大きな特徴が見られまして、従来の文献は主に技術面の記述に終始していたのに対して本書はトイレの文化的・歴史的記述が見られ始めた点です。しかも文化的・歴史的記述の部分では『厠考』と章して「便所」ではなく「厠」の文字を使い区別を致しております。おもしろい記述としては「便所設備価格」として、推奨す

る便所設備がどの位の予算で造ることができるか、その予算が示されています。それによりますとトイレトパーが二十五銭、クレゾール石鹼が四十五銭となっています。

#### 『新時代の住宅設備』

増山新平著 昭和六年九月二十日 三円九十銭

本書はまさに、家を一軒建てるのに必要となるあらゆる設備に関して書かれているものです。その中でトイレに関する記述は全体の四・六%を占めています。著者の増山新平さんの経歴は不明なのですが、序を京都帝国大学建築学教室武田吾一さんが書いている所から京都帝大の建築出身の方だと思われまゝ。このように本書は建築学の分野からトイレにアプローチしているものです。

#### 『近世便所考』

大熊喜邦監修 昭和十二年四月十日 三円

百パーセント『便所』をタイトルとしている衝

撃的な文献です。跋においてこのように書かれています。「本書は我が国においては既に当然出づべくして出でなかつた此の種最初の本であつて、此の点学会業界を通じて先駆となり、将来の発達への礎石となるべき文献かと信ずる」

私も同感でありまして、私の唱える『便所学』はここに大成したのではないかと考えております。

内容としましては、十名の方がそれぞれの専門の分野の事に関して分担執筆をするという形をとっております。まず最初「日本便所考」と題して大蔵省管轄財局の井上一之さんが書かれております。かはやの異名、かはやの語源、太古のかはや、上古時代のかはや、飛鳥時代のかはや、奈良時代のかはや、平安時代のかはや、鎌倉時代のかはや、室町時代のかばや、桃山江戸時代のかはや、と続いておりその内容は文化的・歴史的なものです。後程『厠学』の所でお話し致しますが、昭和七年に李家正文さんが『厠考』という名著を著します。井上さんの「日本便所考」は昭和十二年のもので、

その内容は『厠考』に酷似しています。少々疑問の残る所です。続いて「東洋便所風景」と題して早稲田大学助教授田邊泰さんがアジアのトイレを歴史的に記しています。次に「西洋厠史」と題して東京帝国大学教授藤島亥治郎さんが古代エジプト・ギリシア・ローマからはじまり十九世紀の便所まで歴史的に記しております。戦前における本格的な西洋のトイレ史研究は、この論文のみではなからうかと思えます。しかし、これも後程『厠学』の所でお話し致しますが、西洋のトイレ史研究は昭和四年に『グロテスク』という雑誌での発表が一番古いものだと思います。

その他の章としては「近世便所の構成」「近世便所の実例」「本邦衛生工業の発達」「衛生陶器概説」「衛生陶器附属器具類」「汚物焼却爐」「城口式大正便所に就いて」と技術面に関する内容が続きます。この中で「衛生陶器概説」についてお話しをしておきますと、東洋陶器株式会社常務取締役百木三郎さんの執筆とありますが、断り

書きとして、実際の執筆は東洋陶器の西川弘三さんと桜川貞雄さんが執筆したと書かれております。桜川貞雄さんと言う方は昭和四十一年に『トイレ考現』という戦後のトイレ研究で欠くことのできない名著を著しております。「衛生陶器概説」の内容を見ますに、すでにこの段階で『トイレ考現』の骨格はできあがっていたといえると思います。

#### 『台所浴室及便所設備』

増山新平著 昭和十三年九月五日 二円

本書は先程御紹介した『新時代の住宅設備』と同じ増山新平さんの著によるものです。大澤一郎・櫻井省吾著の『建築衛生工学』を一般読者向けに著したのが『台所便所湯殿及井戸』と申し上げましたが、本書と『新時代の住宅設備』の関係もそれに良く似ておりして、水回りに関して一般読者向けに著したのが『台所浴室及便所設備』です。本書は全体の十一％をトイレに関する記述に割いております。

#### 『便所の進化』

高野六郎著 昭和十六年十二月十六日 一円八十銭

高野六郎さんは戦前の便所の改善・発達を考へるうえで欠くことのできない、大変に有名な方です。東京帝国大学医科で細菌学を専攻し慶応義塾大学教授を経て内務省衛生局（厚生省予防局長）に入られた方です。彼は改良便所の開発と普及に多大な貢献をした人です。改良便所と申しますのは、尿尿を農地還元する際の最大の弊害であります。寄生虫の恐怖を取り除き安全な尿尿を確保できるように改良をした便所のことです。構造的には便槽の内部を三ブロックに仕切り約三ヵ月間尿尿を滞留させることにより病原菌・寄生虫卵の死滅を計るというものです。高野さんの研究が『便所の進化』という形で本になったのは遅いのですが、論文は昭和の始めから雑誌の『公衆衛生』など多くの文献の中でみることが出来ます。また、

高野さんは随筆も書かれておりまして、代表的なものとしては昭和三年の『尿尿尻』というのがあります。この本は評判がよろしかったようで、戦後トイレ研究をされたかたの多くが、若いころ

『尿尿尻』を読み「こんな分野を研究する人がいることを知った」と回想されております。さて、このように本書は細菌学の分野からトイレにアプローチしているものです。

### 『便所の研究』

大泉博一郎著 昭和十七年二月二十八日 二円五十銭

本書は戦中である昭和十七年に出版されております。この文献は戦前の便所文献としては決定的な名著といえると思います。大泉さんは便所研究の視点を序において、このように記しております。「排便は日々缺くべからざる生活の重大な要素であるが、秘事に屬するため舊慣が無反省に傳襲されてゐる事が尠くない。しかもそれは國民衛生上、

生活倫理上に多大の影響をもつものであるから、科學的に、倫理的に、藝術的に、凡ゆる見地から嚴肅なる研究がなされなければならず、そして、よき倫理、よき技術が生み出されねばならぬのである。」

大泉さんは倫理的、芸術的と表現されておりますが、便所を技術的視点からのみ研究するのではなく、「凡ゆる見地から嚴肅なる研究」が必要と説いています。また注目すべきはそれを大泉さん一人が行っているという点です。先に御紹介した『近世便所考』は、確かにあらゆる見地から便所を研究している文献ですが、それは各専門分野十人による共著であります。一人の人物がトイレを総合的に考える視点、これこそが従來の便所学に欠けていた思想であります。内容的には、確かに「便所の発生」「便所の倫理性」「便所の芸術性」「道元禪師の便所感」などなど技術面を越え、多角的な記述となっております。著者である大泉博一郎さんの経歴は横浜工業高等学校講師・建築家

と記されているのみで詳細は不明です。このように本書は建築家の視点からトイレにアプローチしているものです。

## 便所学とは

これまで、数名の文献と研究者を御紹介いたしてまいりましたが、ここで整理をしてみたいと思います。

衛生工学からアプローチした桜井さん。

建築学からアプローチした増山さん。

細菌学からアプローチした高野さん。

建築家からアプローチした大泉さん。

という具合にそれぞれが自分が職業の延長としての立場で自然科学の視点からのアプローチをした研究であるといえます。また、すべてトイレに関してはその時代性もありますが『便所』という表現方法をとっております。人によっては文化・歴史的な人文学的な内容の場合には『廁』と區別

した形で表記しております。

以上のような流れから発生したトイレ研究の流れを私は『便所学』と命名しているわけでございます。

## 廁学の系譜

『東京人類学雑誌第二七四号「小児と魔徐」』

出口米吉著 明治四十二年

出口さんは石川県生まれで、中学の英語の先生をしており、在野の人類学者と呼べる人かと思えます。ここで、トイレではないのですが、尿尿についての研究がなされております。「小児と魔徐」という論文には、人に不浄の文字を用いるのは鬼魔を遠ざけるために行われた。という趣旨のことが書かれております。出口さんが誰を例として上げていたか失念しましたが、例えば、紀貫之は幼名を阿古久曾麻呂（あこのくそまろ）といいました。久曾というのは糞の事で、この名前を見た鬼



魔は糞だから相手にしないであろう、と考えて魔徐としてこの久曾という言葉用いた、というような説です。この論文を読んだ南方熊楠さんが、大層この問題に関心をもちまして『出口君の「小児と魔徐」を読む』という論文を発表しております。また、出口さんは大正三年に同じく『人類学雑誌』に『廁神』という論文を発表しております。廁神に關しての研究はこれが最初かと思われます。

この時代に活躍した柳田国男さんや南方熊楠さん、宮武外骨さんなどはどうであったかと申しますと、その膨大な著作の割合に比すれば、ほとんど触れていないといえます。新たな学問分野である民俗学が誕生しようとするこの時代にもかかわらず、重要な役割を果たした三人の巨人のいずれもが大きくトイレや尿尿を取り上げることには、ためらいがあったようです。

### 『習俗雑記』

宮武省三著 昭和二年二月十八日 一円五十銭

本書の中で尿尿やトイレに關して書かれているのは、「糞尿奇聞」と題した全体の七％に過ぎません。主な内容としては、便所の呼び方、肥取りの話、便所に關する言い伝え、風習などが書かれております。わずかな頁ではありますが、私が本書を取り上げましたのは、この宮武さんは南方熊楠さんや出口米吉さんとも親しく、また後に本格的なトイレ研究を行う李家正文さんや金城朝永さんの著作にも良く登場する文献であると位置づけることができるからです。そのような意味では、この宮武さんの『習俗雑記』は廁学の原点との位置づけも可能なかもしれません。

『グロテスク 九月特集号「世界便所發展史」』  
梅原北明著 昭和四年八月二十八日

この『グロテスク』と言う雑誌は主に性的なことに関する話を掲載した雑誌で科学的と言うよりもむしろ当時としては好色的と言った方が良い内容かもしれません。この中に梅原さんの『世界便

所『発展史』があります。先程、世界の便所について取り上げたものとして『近世便所考「西洋廁史」』

『（昭和十二年）を御紹介しましたが、年代的には梅原さんの『世界便所発展史』の方が早いものです。これも訳本での紹介です。ここでひとつ面白いことに、「奥国性的民族学協会編纂にかかはる『性語百科事典』」の訳であると記してあります。具体的にはウイーン性科学研究所が発行した『ビルダー レキシコン』の訳であるということですが、ウイーン性科学研究所はおよそ人類の性に関することを巨費を投じて研究した研究所で、その集大成として発行したのが『ビルダー・レキシコン』です。発行年は昭和三年から昭和六年にかけて全四巻で発行致しております。四巻と申しても一巻が電話帳二冊分位の大きさがあり、図版も一萬点を優に越える分量があります。ところで、なぜ面白いのかと申しますと、梅原さんが『ビルダー レキシコン』を紹介しているのが昭和四年です。『ビルダー レキシコン』の出版が昭和三

年からですから、『ビルダー レキシコン』の出版とはほぼ同時に本書を入手し、膨大な性科学の記述の中から便所に関しての部分のみをピックアップし翻訳したわけです。つまり梅原さんは便所に關して相当な情熱を持っていた方でありまして、当時の『ビルダー レキシコン』の販売価格を知りませんが相当な高額であったことが考えられます。海外の高額文献を出版と同時に手にし、かつ読破する語学力を持った人物とはどのような人であったのでしょうか、興味の尽きない所です。その後の『ビルダー レキシコン』運命ですが、昭和八年にヒトラー内閣の成立時に、禁書の指定を受けまして、徹底的に焚書となりました。大変に命の短かった文献で、現在、世界でも四巻揃いで收藏している図書館は皆無だと思えます。

#### 『廁考』

李家正文著 昭和七年九月十八日 一円八十銭  
本書の内容は、記紀万葉からはじまり、およそ

トイレに関するあらゆる記述を網羅分類したトイレ研究の集大成と呼べるものです。これ以降のトイレ研究で『厠考』を参考としないことは考えられず、また『厠考』を越える著作も現れていません。大田区立郷土博物館の清水久男さんは『考古学トイレ考』の中で

「これまで、断片的な記録・情報でしかなかったトイレに関する記事を収集・分類・整理し、学問として体系付けたのである。『厠考』以後も、数多くの研究を發表され、そのトイレ学は、日本・中国を中心とした世界的な歴史学にとどまらず、文学・地理学・考古学・民族学・民俗学・化学など、広い分野を基礎とし、トイレについて考えられるあらゆる分野を網羅していると言っても過言ではない。もしかすると、現在、我々が行っている研究も、李家トイレ学を検証しているにすぎず、オリジナリティーを出すことなどできないのかもしれない」

と述べています。私も全く同感で、しかも驚くべ

きことに『厠考』を出版した時、李家さんはまだ國学院大学の大学生であった点です。

李家正文さんの経歴ですが、明治四十二年広島生まれ。國学院大学卒業後、広島女学院講師を経て朝日新聞記者となり同出版局編集長、部長。朝日学生新聞社社長、会長、相談役、顧問を歴任された方です。著書もトイレ研究に関するものだけではなく百冊近い著書があります。ジャーナリストとしての本業を持ちながら、たゆまぬ研究、執筆活動を続けられた姿は敬服の限りです。

『厠考』以外のその後執筆されたトイレ文献を紹介しておきますと、昭和二十三年『厠史話』、昭和二十八年『厠風土記』、昭和三十六年『厠まんだら』『古代厠攷』昭和四十年『トイレット博士』、昭和四十八年『泰西中国トイレット文化考』、昭和五十一年『トイレット天国』、昭和五十七年『対談トイレットで語ろう』、昭和五十八年『住まいと厠』、昭和五十九年『図説 厠まんだら』、昭和六十年『トイレなんでも入門』、昭和

六十二年『糞尿と生活文化』、『増補 廁まんだら』があります。特に昭和三十六年の『古代廁攷』で國学院大学で博士号を取得されています。以上をお示しすれば李家廁学がいかに完成度の高いものか、もはや付け加えることはないかと思えます。

『異態習俗考』

金城朝永著 昭和八年一月一日 一円五十銭

金城さんの『異態習俗考』は『廁考』と同じ六文館から出版されており、そして時期的にもわずか三ヶ月程度遅く出版されているわけです。しかも、皮肉なことに『異態習俗考』の巻末には『廁考』の広告が大きく掲載されており、本書の中には、トイレに関して「拭う習俗」「糞尿雑記」「廁に関する習俗」の三つの論文が掲載されており、しかし、三論文初出は昭和五年、雑誌『犯罪科学』の誌上です。

この論文の中で注目すべき点は次のようにトイレ研究に対する明確なビジョンを提言している点

です。

「便所に関連した資料をせめて日本だけでも大抵の様な項目で蒐集してみる必要があるはしなにかと考える。

一、便所の名称（方言）

一、民家に於ける便所の所在地即ち位置

一、汲取人と糞尿の運搬方法及汲取賃金

一、尻の拭い方

一、室内に於ける便器とその構造及名称

一、廁神の信仰

一、便所に関する俗信

一、野糞の風

等々であるが、もっと細かく、我々は日本の便所を観察して、その資料を蒐集する時期が来ていると思う。本稿も、単にその一項目に過ぎないのであって、徒に珍奇な題材を選び、物好きな人々に話題を提供するのみが目的ではなく、実はこれに関する貧しい資料を御知らせして、広く賢明な読者の御教示にあづかりたいと言う小さな野心があっ

たからでもあった。」

と述べています。小さな野心どころか、大変大きな野心が良く伝わって参ります。しかし、金城さんはこれ以後トイレに関する研究はほとんど行っておりません。そこには李家さんと金城さんの昭和三年から昭和八年の動きを見るとひとつの推測が見えて来ます。

李家さんがトイレの研究を開始したのは昭和三年。そして昭和五年頃には脱稿をし、出版社を探しますが、見つかりませんでした。丁度出版社探しをしている頃、人名は上げておりませんが、同じ事を研究し始めた人が現れたため、出版を断念しかけていたようです。そんな中、昭和七年六文館主人との出会いにより出版となりました。

一方、金城さんは、研究開始年は不明ですが、論文発表が昭和五年です。丁度、李家さんが脱稿し出版社探しをしていた時です。恐らく「同じ事を研究し始めた人が現れた」と言うのは金城さんのことを指すのではないかと推測されるわけです。

そして金城さんは、昭和七年に自ら示したトイレ研究のビジョンを完成させた李家さんの『厠考』を目にする事となるのです。そして昭和八年の自らの著作『異態習俗考』の巻末に『厠考』の広告が掲載される、この流れを考えますに大変ドラマチックな二人の研究者の姿が思い浮かんで参ります。

## 厠考とは

これまで、数名の文献と研究者を御紹介いたしてまいりましたが、ここで整理をしてみたいと思います。

人類学からアプローチした出口さん。

民俗学からアプローチした宮武さん、金城さん。

歴史学からアプローチした李家さん。

という具合に人文科学の視点からのアプローチした研究であるといえます。また、先の便所学の方々とは異なり、職業とは関係なく、在野の研究者

としての立場で研究活動を行ったと言えると思います。例外記述はありますが、トイレの事を便所ではなく『厠』と表現し、区別した形で表記しております。

このように、以上のような流れから発生したトイレ研究の流れを私は『厠学』と命名しているわけでございます。

## トイレ学の系譜

私、出身が歴史学の間人です。歴史をやっている者というのは、どうも現在進行形の事柄に関してはお話ししづらい所がありまして、歴史的評価というのは下せないものであります。大体このトイレ学と言いますのは昭和の五十年代の終わり頃からでしょうか、トイレに関するブームの様なのからで参ります。企業もOTTOやINAXが文化事業に乗り出してきたり、昭和六十年に日本トイレ協会が設立される。皆様の日本下水文化研

究会も昭和六十一年に設立されるなど、様々な観点からトイレを考えることが行われる様になって参りました。そしてこのトイレ学の特徴としては、実に色々な分野の専門の方々が自分の専門領域の中でトイレを研究・発表なされているということではないでしょうか。これは便所学の時代であっても厠学の時代であっても、同様の傾向であったのですが、その細分化が過去とは比べ物にならないほど著しいということです。例えば、JRが車両の開発にあたり、列車トイレの研究・発表を行っています。同じJRであっても駅の設計を行う立場からすれば、駅トイレという全く別の観点からの研究・発表が行われているわけですが、駅トイレひとつを考えて見ても、設計者とメンテナンスをする側とでは、同じトイレでも異なる視点で考えているのです。設計者は洗面台に大きな鏡を設置し、よりトイレを広く、美しく、バランス良く設計しようとしています。しかし、メンテナンス側からすれば、天井にまで達するような

大きな鏡では、手が届かず清掃ができず困っているという現状があるのです。設置者としても鏡を

壊された場合、多額の修理費が必要となり予算的に苦しく、あまり大きな鏡を好まない。などなど、現在のトイレ学は知れば知るほど細分化された形での研究がなされています。もう一例をあげるなら、トイレひとつをとってみても行政側も細分化されており、つまり、交通機関のトイレは運輸省に属し、高速道路のトイレは建設省、自然公園のトイレは環境庁、都市公園のトイレは建設省、防災トイレは自治省消防庁国土庁、便器器具は通産省、尿尿処理は厚生省、浄化槽は建設省厚生省、公共下水道は建設省、農村集落排水は農林省などなど、これまた多岐にわたっています。一般に縦割り行政の問題点を耳にしますが、現在のトイレ学はまさに縦割りの研究が個々に行われており、それを一人の人物がトイレという視点から互いに関連づけて横のつながり、連携を構築しようという視点に欠けているのが最大の問題点ではないで

しょうか。

## 総合トイレ学への展望

私が職業としている世界史というものを例に出してお話しをしたいと思うのですが、大学には日本史学科・西洋史学科・東洋史学科などがありますが、世界史学科というのはありません。学問的には日本史・中国史・ドイツ史・フランス史・イタリヤ史などの一國史は研究者もいて、研究の蓄積があり体系づけられていると言えます。しかし、これら一國史をたくさん集め集大成したところで、それは世界史とは呼べません。単に各國史の集合体、万国史に過ぎません。世界史を構築する作業というのは、一國史に登場する事柄を他の一國史の事柄と互いに関係づけ、結び付け、世界史の中に位置づけて行くことなのです。そこには、歴史に対する哲学・思想・視点というものが必要になるのです。

今、私が提唱したい総合トイレ学と称するものは、トイレ研究における各国史的研究ではなく、言わば世界史の構築なのです。建築におけるトイレ、衛生工学におけるトイレ、民俗学におけるトイレ、歴史学におけるトイレなど一國史レベルの研究は研究者もおり、研究の蓄積もあります。その個々のトイレ研究を有機的にひとつの思想・哲学・視点をもち構築して行きたい、そしてそれが必要な時期が訪れて来ていると思うのです。

## トイレ異名について

さて、今回のお話のもうひとつのテーマでありますトイレ異名についてですが、今日お手元に配布いたしました冊子にはトイレ異名として六五〇語を収録いたしております。その後増補を重ね現在では一一〇〇語に達しました。この研究は、私とその体系化を夢見る総合トイレ学の一つのテーマ一つの章として取り組んだものです。トイレ

研究を決心した日に三十年のおおよその計画を立てました。一つのテーマを決めおのの三年間取り組むことにより、三十年で十のテーマ・章を完成させようと思ったのです。三十年後には、総合トイレ学もその輪郭が浮かび上がってくるのではと考えたわけです。ですから現段階で私の提唱する総合トイレ学とは一体どのようなもののかを皆様にお示しすることはできません。皆様のお考えを伺いながら今後も試行錯誤していかなくてはいけないと考えております。具体的なビジョンを御示しすることができず、どこまで御理解いたされたか不安の残る状態ではありますが、大体のお話しは終わりに致したいと思えます。最後にこのような機会を与えて下さいました日本下水文化研究会と貴重なお時間を割いてお集まり頂きました皆様に御礼申し上げて終わりに致したいと思えます。どうも、ありがとうございます。



## 追記

成十四年に出版しましたので、併せて御覽  
頂ければ幸いです

(一) 講演の後、衛生工学あるいは陸軍の研究分野に森鷗外の『衛生新篇』を加えては、との御指摘をいただきました。御指摘の通り森鷗外は漏らしてはいけない人物でした。また梅原北明氏に関する資料も御教示頂きました、この場をお借りして御礼申し上げます。

(二) 講演はB四判で三十七枚の資料を配布し、実物文献を提示して行いました。本稿に掲載すると膨大な紙面になるのでここでは割愛をしました。そのため、完全な講演録ではなく、内容を伝えるために、必要に応じ削除・加筆した部分があります。

(三) 本講演は、『総合トイレ学』に関する内容が中心になってしまいました。『トイレ異名』については、日本下水文化研究会の下水文化叢書七に『便所異名集覧』として平

(平成十四年六月十五日)